せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42－2590
第162号・平成15年3月1日

年表で読む 古平の歴史

《68》

金融機関の移り変わり

古平信用組合〈2〉

■産業組合中央会から表彰

大正4年に創立以来9か年が経った大正12年、貯金、貸付金共に大きく増加し、事業の全般にわたって業績も順調に進展していることから、成績良好な組合として産業組合中央会から表彰状を受けた。

■事業の現状

大正末には町内に北海道銀行古平支店、古平・浜町両郵便局（貯金のみ取扱い）、古平信用組合、質屋業などの金融機関があったが、当時の銀行は主な漁業者や商店など大口の金融を取扱い、ほかはそれぞれの取引に応じて利用されていた。

また、このほかに無尽講（むじんこう）が町内で広く行われ、身近かで手軽な金融として人気があった。

古平信用組合では町内の銀行とも協調を密にし、円滑な運営を図るため組合の余裕金はすべて銀行に託していた。また、銀行とは努めて金融上の意見など交換する機会を多くし、意志の疎通を図り、事業資金に欠如がある時は銀行からの借り入れによって処理していた。

そのほか町内には個人の金融機関があったが、それらとも相互扶助の考えで提携を惜しまなかったが、組合員の利益を第一とすることから、その取扱い利率は次のようであった。

種別	貸付金利率（月）			預金利率（年）		
	最高	最低	普通	最高	最低	普通
銀行	1分0厘5毛	8厘	9厘	7分	2分9厘	5分
個人	3分	1分2厘	2分	（預金は少数あるが省略）		
組合	1分2厘5毛	9厘	1分1厘	8分	3分6厘	7分

組合設立の当初は、経費の節減などを図るため緊縮主義をとり、すべての事務は役員の自宅で行い、ほかに事務員はいなかった。役員はもちろん無報酬であった。主として組合長（梅野）、常務理事（米田）が事務を掌握し、ほかの理事・監事の合議制で組合全般の事業を処理していた。

しかし、五年を経過し、組合の発展と共に事業もいよいよ煩雑になり、このような体制ではとても円滑な運営が出来ないことから、大正10年に事務所を新築し事務員を置くことになり、その後、理事や監事も増員することになった。

貸付金については、信用の程度によることは当然だが、保証人を付けることを原則とし、担保貸し付けであっても場合によっては保証人を必要とした。担保物件については時価の五割、海産物については銀行の例 ⇦

創立時からの業績の推移

年度	貯金高	貸出金	出資金	組合員数
大正4年	571円	1、485円	1、011円	160人
大正7年	5、456円	25、528円	11、299円	277人
大正10年	68、896円	167、485円	40、000円	619人
大正13年	126、592円	240、380円	45、740円	638人

高野名幸作さんの日記から
当時の世相を見る

【63】

大正一一年

▼四月九日

昨日来の雨風も今日は晴れてなぎになった。港に入っていた困の枠を、また群来村へ川崎船が引いて行った。この日、歌棄山中で漁があり一、〇〇〇石以上獲れた。今日はどこでも鰊つぶしに忙しい。

▼四月一〇日

鰊歌棄山中で△、キ、又などで漁があり、刺網も多いところでは四〇～五〇本も獲ったという。浜中、沢江方面が刺網で一番漁だ。群来村は建網、刺網共に不足、前浜の建網四、五統は漁獲皆無だ。全部で一五、〇〇〇～一六、〇〇〇石は獲れたろう。

▼四月一一日

朝のうちダシ風が強く吹き、今朝の鰊漁は少々。鰊つぶしや鰊割きの手間で忙しい。家でも貰った鰊の鰊つぶしをやる。正午頃から風も止み静かになった。雪もずいぶんと消えた。道路も乾いて、子供らがコマ廻しや手まりつきをしている。店はいたって閑散だ。夕方浜へ出て見る。風は静かで波もなく、気候も暖かくなり、さも鰊が群来て来そうな夜だ。明朝は定めし大漁あるだろう。十五夜の月がこうこうと輝き、前の四〇〇燭光の電灯の明るさで戸外は昼のようだ。明日は英国皇太子が東京にお着きの由、定めし賑やかなことであろう。

▼四月一二日

今朝こそ鰊漁があるだろうと起きて聞けば、一向にないとのこと。さびしいことだ。マサさんが八へ鰊割きに行く。家でも先に架けた鰊割きをやる。天気が良いので外に居る方が気が晴れる。今日は暖かいので、日中だとこたつも要らぬ。中庭の雪も消えて乾いたのでムシロを敷いて

⇦もあり七割を限度とした。利息は最高月歩1分2厘5毛（1・25％）で、延滞利息は日歩5銭であった。

貸し付けの用途は商業資金が最も多く、漁業資金がこれに次いでいるが比較的多額で、大正14年当時は貸し付け限度額を5千円としているが、担保のある場合は1万円までの貸し付けをするようになった。

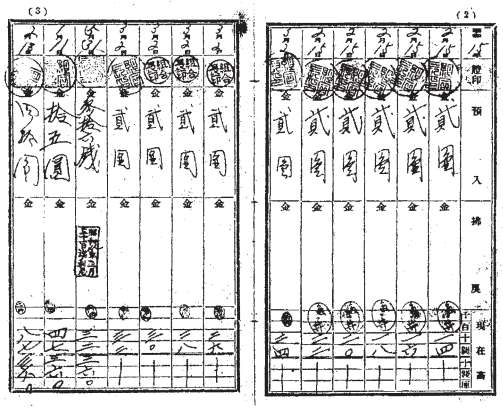
商業や漁業関係の貸し付けは、短期貸し付けで返還が順調だったが、長期固定貸し付けとなる土地購入資金などについては、土地柄から相当便宜を図っていた。

貯金は定期貯金、普通貯金の2種で、利率はどちらも年7分2厘であったが、大正10年から普通貯金を当座貯金＝日歩1銭）と、小口当座（現在の普通預金）＝日歩1銭5厘の2種とし、定期貯金も年8分に改定した。貯金は10銭以上を取扱い、最高限度額はなく、利息は12月31日で精算し元金に編入、また払戻の時はその都度精算した。

■組合員との融和と勧誘

役員は一致協力、率先実行で自ら模範となり、誠心誠意をもって組合事務に当たった献身的な努力が、期せずして組合の発展をなしたものである。総会などでも常に組合の活動を理解してもらえるよう努め、組合への知識と理解を深めてもらうよう名士の講話なども行われた。また、事務所は常に解放し、誰もが組合に出入りしやすい環境をつくり、組合員の慰安に関しても留意し、役員が各町内を訪問しては組合員の勧誘などにも努めた。

（この項終わり）



＜古平信用利用組合貯金通帳＞

やると、子供らは日なたぼっこをして遊んでいる。長尾床屋で散髪する。静かな夜、皆、鰊漁を千秋の思いで待っている。

▼四月一三日

今日も鰊漁はさらに無い。こうして一日一日が過ぎて行くのは何か寂しい。一晩でどっさり来るだろうと、それを皆楽しみにしているのだ。大漁手ぬぐいでも出るような漁がほしい。天気は良し、ナギは良し、実に申し分ない。

▼四月一六日

起床六時半、今日も鰊漁は思わしくない。沖村方面で二、三杯あっただけ。これでは景気は引き立たない。大漁旗の立つような漁であってほしいのだ。夕方浜へ出て見る。ナギは良し暖かい。今夜こそ鰊漁ありそうだ。帆前船五隻が入港している。

▼四月一七日

六時半起床、昨晩から鰊模様あり。歌棄、沢江方面で二〜一〇杯ぐらい獲ったところがある。九時頃からにわかに暴風、時化になり大騒ぎ。発動機船や古英丸に引かれて港内に入る船、大波の中漕いで行く船、水没する船もあり大変なことになった。一隻が歌棄で座礁し、船が壊れてしまい漁夫一人が溺死したとのこと。気の毒なことだ。外に大きな被害は無かったが、鰊はたいていい投げたとのことだ。風も波も夜になってもおさまらぬ。夜、美国舎から網、ロープを買いに来る。五〇余円の入金ある。

▼四月一八日

起床六時半、今日は群来村困漁場七、八杯、熊木ほかも五、六杯宛て獲る。熊さんは困漁場へ行く。ほかのところは一向に漁がない。寂しいことだ。二〇日頃、佐渡、東京方面へ行くべく支度をする。町の中もだんだん雪が消えてきたので、自転車を出す。新聞によれば、帝国ホテルが去る一六日出火、四千坪の建物が全焼せりとのこと。建物の損害三百万円余、その他も大した損害とのこと。

▼四月十九日

起床六時半、昨夜の模様では今朝こそ大漁ならんと、未明の三時頃より中央通りを通るモッツコしょい連中は絶え間ない。家でも四人共出かけたが、一向に漁が無くて皆戻る。実に失望だ。今までのところ古平は近郊一番の不漁だ。昔から古平は不漁無し。他郡に負けることのない場所だったが、本年はどうしたものか。殊に前浜歩方連中は皆無だ。一日一日と時期はなくなる。心寂しいようだ。この日はカレ延縄用の岩糸、綿糸の客があり、二十余人も来たので忙しい。鰊の方は暇なので、そろそろカレ釣りか。鰊場中にこんなことでは実に心細い。四時半頃からダシ風が吹く。今夜も駄目ならん。

▼四月二十日

起床七時、期待してたが鰊漁無し。どうしたものやら、本年は古平は竜神さんにすっかり嫌われたようだ。鰊漁がさっぱりでは市況も引き立たぬ。例年なら古平は他郡より勝つのだが、今年は全く例外だ。浜は一般に暇なので、延縄の道具がよく売れる。カレ釣りもポツポツ出る。タラ釣りは近年稀なる程の大漁で、このところタラ釣り連中は元気がよい。

▼四月二一日

起床六時半、鰊漁はさらに無し。浜は寂しい限りだ。今日は二一日、鰊もこの分だと悲観せずにはおれない。前浜も一回は群来るのだが、今年に限りまだだ。この分では気の毒なものだ。今年は他郡にも負け残念なことだ。しかし、鰊漁は一晩ともいえぬから、まだまだ望みはあるだろう。今日も一日、延縄道具が売れる。町の中の雪もたいていは消えたようだ。

▼四月二二日

七時起床、鰊漁さらに無し。鰊も八分通りは見込みがないらしい。浜では悲観している。この分だと町の景気も悪いだろう。天気は快晴。鰊粕を干すには都合がよいのだが……。大正九年は大漁だったが、雨続きで困ったものだが、本年は不漁で鰊も無いのに天気だけは良い。世の中はままならないものだ。熊さんらは鰊割きに行く。カレ、マスの延縄の客で店は忙しい。午後四時、浜町から沢江辺りまで散歩する。カレの延縄漁はどこも大漁のようで漁師も元気がいい。六時頃帰ったが、風はなく、ナギはよし、静かなものだ。鰊漁も何とかあと一万石は獲ってもらいたいものだ。　（続く）

小樽市合唱祭に出演して

大澤文子

私はずっと以前からこの町にもっと潤いがほしい…それにはお母さんたちが〝くちびるに歌〟をもち、家庭に明るい雰囲気をつくるのがよいのでは…と考えていた。

機会をみて大正生まれの仲のよい「大正クラブ」のメンバーや、若い人たちのグループに相談してみたところが皆大賛成。早速、指揮をして下さる先生…と、小学校の久保田功先生にお願いしたところが快く賛成され、トントン拍子に話は決まった。

会場は小学校の音楽教室を土曜日の午後借りることに決定。

「歌の好きな人ならどなたでも…」という方針だったので、高校生をはじめ事務員、教員、お母さんたちなど、年代も十代から四十代まで二十人のメンバーとなった。

いよいよ昭和四十年二月二十七日、『なぎさコーラス』としてうぶ声をあげたのである。

歌の好きな人たちだけに一曲を歌いこなすのも早い。何曲も必要となるので、私はたびたび札幌へ出向き狸小路の楽器店へ足を運んだ。そして、伴奏曲をマスターするためピアノに向かう日も多くなった。

二月に発足したばかりなのに、八月には全後志婦人大会、古平小学校開校九十周年記念式典等々出演の声がかかり、うれしい悲鳴をあげていたのである。白いブラウスに紺のスカートという清楚な姿、それに「しろうっとぽさ」が新鮮な話題をふりまいたのであろう。

またその頃、突然、札幌のHBC放送局から録音させてほしいとの連絡があり驚いた。一瞬とまどいを感じたが、久保田先生に相談、受けることにした。

昭和四十年頃の漁村地帯には女性コーラスはなかったのであろうか。

十月早々にHBCから録音班が来町、小学校の音楽教室で準備にとりかかったのである。

十一月十三日と二十日の二日間、午前九時半からの「ママさんコーラス」の時間に放送したいとのこと。録音準備も完了。

十月十日午前十時半より録音に入った。十三日放送分の三曲は「夕日のなぎさ」「時計台の鐘」「ゆりかご」

二十日放送の三曲は、「北上夜曲」「ほろほろ鳥」「アフトンの流れ」だった。

「指揮、久保田功先生、ピアノ伴奏…」アナウンサーのなめらかな声をうつつに聞き、会員一同指揮棒の流れを真剣に追い、すばらしい歌唱力を聞かせてくれた。

「ハーモニーが美しい」と、録音班にほめられホッとした。終了後、会長として…とインタビューされたが、予期していなかったことだけに記憶にもない。

翌年にはまたまた大変な行事が待っていたのである。

第十三回道民合唱祭小樽後志地区大会が、小樽市民会館で開催されるのでぜひ出演するようにとのこと。うれしさと不安な気持ちが交差するのみ。いつか小樽合唱連盟理事長上元芳男先生のご指導を受けたこともあったが、出演するにあたりこの度も上元先生のご指示により、札幌の音楽家久々津典子先生お三方に賛助出演をお願いすることになった。

指揮者には転任された久保田先生に代わって、水野校長先生のご指示により足立勇先生が迎えられた。

昭和四十一年十一月二十七日、小樽市大合唱祭の当日となった。二十団体、九百人の出演という。

『なぎさコーラス』はプログラム第一部の五番目だった。アナウンサーのさわやかな声がマイクから流れた。

「指揮足立勇先生、ピアノ伴奏大澤文子」…と。曲目は「アフトンの流れ」「もみじ」「いずみのほとり」の三曲。

会員一同、日頃つちかった歌唱力を存分に発揮し歌い終えた。上気した頬に満足感の笑みをみなぎらせ舞台を降りのだった。なお四時間にわたる大音楽会の途中に「ちいさい秋みつけた」を、上元先生の指揮により九百人全員で合唱するなど、満員の聴衆は大拍手を送り感激のるつぼと化したのだった！

ああ－私はいまあの時の楽譜をとりだし、そっとピアのキーにふれてみるのだった。

註＝この記のために足立勇氏に一部資料の提供をいただき感謝。

札幌通信 第3信

谷地の想い出

吉川義雄

私の生れ育った丸山町は、永い間、ヤチと呼ばれていた。その意味が分かったのは古老の話や、町史を調べているうちに納得したのだが、どの辺から谷間が形成されていて、どこの土をどう埋め立てのか今もって分からない。

少年期、ベンテンと呼ばれていた海側の入船町の方が、山側の丸山町より高いことも承知していたが、あまり不思議に思ったことはなかった。

大雨のため、丸山町一帯が水没しても、心得ている住民は、最初から床高にしてある家の中で、畳をどうするか、あまり心配していなかったようだ。子供達はすぐ集まって、広大な陸地にできた水上にイカダを浮かべて遊びまくった。

鰊漁が終る頃、丸山の下一帯は賑やかになる。ここは埋め立て当初から、鰊の干場として利用価値を定めてあったようだ。私の生れたと思われる、ワタナベの長屋と呼ばれ、十二世帯も入っていた平屋のハーモニカ長屋が、丸山に一番接近して建っていて、それから前は山麓まで野ッ原、山に並行してその原ッぱは岬近くまで続いていた。

この広大な干場に、結束された真新しいムシロが幾つか積みあげられる。こんな遊具を子供達が見逃すはずがない。どんなに叱られようと、登ったり跳ねたり、山を崩したり、用途が分かっているから、この遊びはイヤでも終らされることも知っていた。

山麓はるかに鰊のしめ粕が春の陽光にさらされ、切断する作業から、細片にする作業まで、男女の作業員が、これまでの鰊場の喧騒とは程遠い、唄声入りののどかな労働が終日続く。

丸山には、千をはるかに超す烏の大群が住んでいるはずだが、食糧もこれだけ大量に並べられると一羽も飛んで来ない。

鰊漁期も終わる頃は、それを製品にするゆとりのなかった鰊から、かろうじて数の子ぐらいは抜くが、それとて限度があるから、大半はしめ粕として、そのまま大釜の中に直行する。

余り細かくされないうちは、煮上がった一匹ままの鰊だから、油こそ絞られてはいるが、数の子まではらんだ立派な食品に見える。試しに口にしてみたが、味も素っ気もないものなので、すぐ口から吐き捨て、以後は、どんなに形が見事でも、二度と口にしたことはない。

長屋からほんの少し丸山側に、ツルベで汲みあげる井戸があった。桐の木が五本程並んで井戸までの道の傍にあり、夏の陽を遮るので、長屋の子供達はムシロを敷いてそのあたりでよくゲームを楽しんだ。

私も妹も少し成長した頃、長屋の近くにわが家が新築されたが、私は友達の多い長屋に向かってとび出し、終日離れなかったし、水汲みは毎日のことだから、「いつまでかかるんだ」と、母によく叱られた。

昭和二十四年五月の大火は、その全部の舞台を消し去ってしまった。焼け跡にたたずんだとき、それまで海外でも本土でも、イヤという程同じ風景を見てきたので、妙な落ち着きで、感傷はほとんどなかった。

大火後、都市計画の区画が進み、わが家のバラック近くにも小公園が造成予定地となり、そこに町内で防火水槽を掘ることになった。

火災後だけに勤労奉仕の人手は多かった。二メートル程の深さにする予定だったが、その近くまで掘り進むと、まさかと思う程の大木が横たわっていて、深さも、大木もそれなりにして、素掘りを終え、木枠で囲み、工事を終わらせた。

海産干場も、わが家の周囲も、あの想い出の長屋のあたりも、昔はどんな風景だったか知らないが、丸山から続いて幾つかの谷間をつくり、その周辺には大木が茂っていたのだろう。大火は、思いがけない昔をほんの少しのぞかせてくれた。

吉平いろはうた

き　金次郎仰いで通った小学校

□金次郎とはどんな人？

幼名が二宮金次郎、後に尊徳先生と言われたが、年配の人には名前がよく知られているわりに、金次郎のようにその実像があまり知られていないという人も珍しいことです。

これは戦前、小学校の教材として採り上げられることが多かったことから、ちょうど昔話に出てくる金太郎や桃太郎のように、子どもの頃のことだけが強調されていたからでしょうか。

多くの人の知っている金次郎像というは、幼少の頃から、貧しかった一家の生計を支えるために働き、好きな学問をするために、山へたき木を取りに行く途中でも熱心に本を読んでいた――という子どもたちにとっての勤労と勉学の手本としてでした。

この逸話は戦前の教育の考え方とも一致して、金次郎少年は修身（しゅうしん＝教育勅語をよりどころとして道徳を教えた）の教科書にも載り、唱歌にも歌われました。

□農村の復興に努力

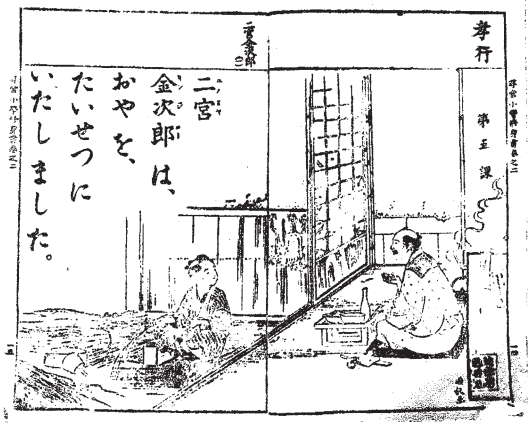
尊徳（幼名金次郎）は、人間の生きていくための深い考えを、当時、生活に悩み、学問もない大衆にどうして解らせようかと考えました。それは、まずやさしい言葉で語りかけることでした。

「自分が、いくら悟りをひらき人格をみがいても、自分が満足しているだけでは世の中の役に立たない。」と考えて、やろうと思えば誰でも出来るような生活の方法をやさしく組み立て、それを説いて廻ったのです。

中には尊徳の教え方に反対する人もいましたが、「そうゆう人たちにも優れた力があるのだから、それに適した仕事を与えて村の建て直しに参加させ、愛と協同の村づくりをする」と言い、それを実現したのです。

それを聞いた藩主は、「お前のやり方は、中国の教えにある徳をもって徳に報いることである」といって大いにこれを称揚しました。このことがあってから後、尊徳は自分の教えに報徳という言葉を使うようになったのです。

＜小学校・修身の教科書＞



＜二宮金次郎肖像画と、下物井村の名主・文蔵へ宛てた手紙にある二宮金次郎の署名＞

このような功績から、尊徳は時の老中に見え出されて幕臣となり、各地の農村の復興に著しい成果を挙げました。

□報徳運動が起こる

尊徳（金次郎）の考えは「真心をもって働き、働いて得たものは蓄え、蓄えたものは世の中のために使う」というものでした。

この考えは尊徳の門下生や信奉する人たちに受け継がれ、生活の苦しい農村の更生と建て直しを目標として、道徳と経済が一体となった報徳社という団体

が組織され、明治になると『報徳社運動』として全国に広がりました。

十勝支庁豊幌町には、この運動を実践するために入植した人たちによって、報徳二宮神社が建てられています。

また、尊徳の少年時代の苦労話や熱心な勉学ぶりは学校教育にもとり上げられ、ある小学校に、たき木を背負った少年時代の金次郎の銅像が建てられると、それがまたたく間に全国各地の小学校に広まる勢いを見せました。

＜文化会館敷地に建っている二宮金次郎石像＞

□金次郎の銅像を寄贈

昭和一五年（一九四〇）は、日本の紀元といわれる皇紀二六〇〇年に当たり、戦時下ということもあり、これを祝う行事が各地で盛大に行われました。

これを記念してこの年の八月、高野平治、貞治、泰治、登喜子四人の連名で、古平小学校に少年時代の二宮金次郎の銅像が寄贈されました。

銅像は当時の校庭に設置されることになり、高学年の児童がその土台となる玉石を海岸から運び、児童も参加して竣工式を祝いました。

金次郎は修身（しゅうしん）の教科書にも載り、唱歌にも歌われていて、その勤倹と勉学ぶりが児童の手本とされる時代でした。

銅像は校門を入るとすぐ右手（現在地）にあり、薪（たきぎ）を背負った金次郎の姿を仰ぎ見ては登下校をしていましたが、その銅像となった金次郎少年の姿は、当時の田舎の生活環境からはごくありふれた少年の姿でした。

また、その隣の奥まったところには奉安殿（ほうあんでん＝昭和天皇と皇后の写真、教育勅語などを収めた建物）があり、その前を通る時には立ち止まって、深々と礼をするのがどこの学校にもあったきまりでした。

やがて戦争が激しくなり、昭和一七年には鉄類が不足したことから金属回収令が出され、学生服の金属ボタンからお寺の鐘なども集められ、この銅像も供出されてしまいました。

その後、昭和一九年になり、高野平治さんらから残されていた台座に全く同じ石像の金次郎像が設置され、それが現在の金次郎像です。材質は石なのに、なぜか以前のように銅像と呼び慣れています。

□古平町にも報徳会

古平町にも尊徳の志を継いで、大正のはじめ頃「古平振興報徳会」が結成されました。

その後、昭和四三年に解散しましたが、解散に当たって、会の財産を古平高等学校設備資金・公民館（後の文化会館）建設資金として寄付しました。解散時の会長は後の古平信金理事長越中庄七さんでした。

平成八年に、関係する書類を古平町史編さん室に寄贈していただきましたが、この原稿を書くに当たって収蔵した資料が見つからず、年表の記事から記述しました。ご了承ください。

戦中 中蹂

泣き笑いの樺太漁場体験記

戦後 後蹂

吉野慶一郎

街をさまよって食料を確保　街へ出て見ても日本人の姿はなく、もちろん商店などは開いていません。無人の家をのぞいて見ると、朝食の準備か食事の最中だったのか、食卓には食事のあとがありました。突然の砲撃に、町民の驚いた様子がありありと残っていました。

食料が無ければ生きていくことも出来ないので、畑にある野菜など、仕方なく、悪いことですが黙っていただいて来ました。それぞれが持って帰って来た食料で、二週間程の収容所生活を過ごしたということでした。

不安の中で、不自由な辛い収容所生活だったと思いますが、今こうしていると、緊張した中にも家族の連帯感で少しは心の休まる思いがしました。

また、真岡の町が攻撃された二〇日、真岡郵便局の電話交換手をしていた九人の女性が、服毒自殺をしたという痛ましい事件は後で知りました。

野田町にもソ連軍が入って来る　樺太のどこかで、まだ戦闘が続いているかも知れないという時、野田にもソ連軍が駐留することになりました。

前に一度来ているので、特に緊迫した状況ではありませんでしたが、町民にとってはまったく経験のないことでした。

しかし、事態は思った程緊張したものではなく、町もどうやら平静を保っていました。町の行政や組織はは今まで通りでよい、だが役場へ行くと町長のほかに、もう一人ソ連軍の隊長も町長で、町には二人の町長がいることになりました。

また、小学校も同じで、日本人とソ連人の校長と二人おりました。

憲兵隊将校の家族とのつき合い　そのうちわが家へ憲兵隊の将校だという軍人が二組来ました。一組は若く、子どもが二人おりましたが、二人の軍人とも任務を離れると家族と仲良く、二人とも私のことを主人と呼びます。

彼らは日本語を覚えたいと言い、私らもロシヤ語を覚えたいので、お互い教え合うようになり、若い方の将校の子どもは三才と四歳でしたが、すぐ家の子どもらと仲良しになり、盛んに会話をしていました。

将校になると一般の兵士と違って物資の配給も良いようで、奥さんが家族の分も料理をしてくれることもありました。すべての食料品は配給でしたが、牛乳の配給も日本人の分は少なく、それでは気の毒だと配給の牛乳を回してくれることも度々でした。

働かざる者は食うべからず　食料品は配給でしたが、職場のない人には配給はありません。働かない者には厳しい社会です。食料品の配給を受けるには職場の証明書が必要ですが、病人や幼児、妊産婦には特別な配給がありました。

また、漁場などでも人を雇うと相当した配給があったし、ソ連側の漁業事務所長がいて、それが漁業組合ににらみを利かせて漁をさせていました。

ソ連軍は今まで通りの仕事を続けるようにと言い、男は引き揚げて帰ることは許されませんでしたから、漁をする人手には不自由しませんでした。

一般ソ連人の貧しい生活　野田にも職を求めてソ連人が入って来るようになりましたが、軍人はともかく、一般の労働者や低所得者などは戦勝国とはいうものの、われわれから見ても哀れに思える姿かっこうで、持ち物といっても粗末なトランク一つぐらい、日本人が引き揚げて行った空き家に入っていました。

食べ物は麦粉を溶いてフライパンで焼いたものに、煮物ぐらい。家の壁板をはがしては燃料にしていました。（続く）

俳句鑑賞

思い出の句

俳句は、季節を詠むことで世界に誇るべき詩です。季節や季語は、歴史の歩みの中で培われ定着しました。

さて、古平では年二回お祭りが挙行されています。七月と九月ですね。俳句でお祭りと言った場合は京都の下加茂神社の葵祭を言い、五月五日に挙行されます。これは歳時記上での約束で、往時、京都に都があったことに由来します。これからも季語に関する話題を紹介して、取り上げてゆきたいと思います。

さて三月、北国はまだまだ雪景色の中で冴返る日々が続いていると思います。

道路網の整備と開発で、交通の便は見違えるばかりです。四十有余年前の古平は冬は陸の孤島と化し、時化ると幾日も欠航しました。

叔父、句丈の句に、

陸七里吹雪さりとて船は厭

があります。三月も吹雪く北の自然と、人々は闘っていました。しかし三月はまたゆったりと牡丹雪、淡雪の季節です。

お楽しみコーナー 2

俳誌【悠】主宰　水見壽男

次の雪その次の雪降り積もる

昭和五十七年の作品です。

牡丹雪がゆっくりと、しかも次々に空に湧き、花びらのように降ってくる様子は、一つの幻想世界でした。その光景をじっと凝視していると、空から雪と共に白い音が降ってくるような錯覚に心の裡がとらえられました。白い世界に白い音楽。しかし、この時の私は、小樽の病院で手術した父を見舞って帰りの道程のことでした。父を忘れ、唯々自然の中に埋没し、自然の中の景に没頭していた気持ちでした。あるいは逃避だったかも知れません。眼前の景から、まず一句が吐き出され、次には

雪降って雪止んで街美しく

の句が生まれてきました。

そしてふと自分にかえった時、

雪に耐ふ人の強きを悲しめり

の句が、句帳に認められました。

後日、この時の句を整理の上父に見せたところ、何句かは赤丸が付けてあり、掲出の三句は、私が初めてホトトギスで三句欄を飾った思い出の一コマです。

編集雑記

▽二月は逃げると言いますが、大の月より三日少ないせいか、駆け足で過ぎてしまったようです。

▽それと、今月は特に来訪者や外部との接触が多くありました。日本テレビ（豊浜トンネル崩落関係の取材）二回、NHKテレビ（ぐるっと北海道番組の取材）三回、山形県小国町から『たらつり節おどり』を同好会でやりたいとのことで、参考資料を送りました。

▽新潟県寺泊町から『たらつり節』の歌詞について照会。これは資料があったのですぐ送りましたが、向こうからは北前船関係の資料を送ってくれました。

▽道南の八雲町から『稲倉石』の語源の照会がありましたが、残念ながらこれは不詳と回答。

▽余市警察署から、明治の入植者についての調査の依頼等々。

▽信金の越中理事長さんには、またまたありがとうございました。

▽『せたかむい』を沢江・丸山集会所にも置くことにしました。

▽ふるさとのアルバム第1・2集（古平のにしん漁）は品切れ。第3集は20部ほどあります。

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

—4—

橘　義春

私たち初年兵は『見ざる、言わざる、聞かざる』がよい。これが軍隊で身につけた初年兵の処世術である。

日曜日でも私たち初年兵には外出はない。人情家の竹田班長は、外出前に下士官集会所で石油缶に入った角形のビスケットを買い入れ、皆で食べるようにと言ってから外出する気配りようだった。連日の腹ペコで飢餓状態のような私たちにとっては父親のようで、本当にありがたかった。

私個人も竹田班長にはかわいがられたようで、夕食後など下士官室に呼ばれて、各人が故郷や知人などに出す手紙の検閲係をさせてもらい、私が班長印を押して投函するまで信用してまかせてくれた。

内務班にいると、私たち初年兵は使役といっていろいろな雑用に駆り出されるので、それで班長は温情で私を下士官室へ呼んで、手紙の検閲係をやらせてくれたものと思う。

また、班長は各人の特性に応じて、小銃、軽機関銃、擲弾筒（てきだんとう）とそれぞれの分担を決め、私は擲弾筒手としての教育を受けることになった。

擲弾筒というのは、片手で持ち運びが出来る花火師が使う筒のような兵器で満州事変以来陸軍で使われ中隊のトラの子と言われている。小型の迫撃砲とでも言った方がいいかもしれない。最大の飛距離は六五〇メートル程で、一発の殺傷能力は一五平方メートルで爆発音が大きく、敵に恐怖感を与え戦意を喪失させるという効果もあり、小型ではあるが歩兵部隊には欠かせない重要な花形兵器である。連日、擲弾筒教育が行われ、その教育係は楢岡上等兵で、軽機関銃は竹田班長、小銃は白ブタと決まった。

演習で楽なのは擲弾筒で、一番辛いのは小銃だったが、白ブタが教育係ときては最悪の貧乏くじを引いたことになる。それでも皆は毎日へとへとになって訓練に励んでいた。

五月二九日、北方のアッツ島の日本軍がアメリカ軍の猛攻を受け、ついに山崎大佐以下全員が玉砕との報が入る。この部隊の主力は私たち盛岡の北部六二部隊から行った兵士たちである。私も六か月早く入隊していれば同じ運命をたどったと思う。人の運程わからないものはない。

とうとう部隊の解散が本物らしく感じられる。私たち初年兵には情報は入らないが、何か変だ。毎日の教練がなくなった。それに代わり、朝食が終わると体操の服装で中隊前に整列し、竹田班長が先頭で駆け足で営門を出て、行き先は盛岡の高松公園の池の側で、別命があるまで解散となる。

それきた！　とばかりに、私たちはあちこちの茶店を探しては飛び込む。あるある、そば、あんころもち、蒸しパンなどかたっぱしから胃袋に放り込み、満腹したところで池のほとりをぶらぶらしていると、一一時頃集合の声がかかり、兵営まで軍歌を歌いながら帰った。竹田班長様々だ。

こんなこともあった。皆を北上川へ連れて行き泳がしてくれ、私たちも童心にかえり思いっきり泳ぎ回った。

こんなことが毎日続いたら、家を出るとき持って来た小遣銭が乏しくなってきた。早速、親戚の矢代敏夫さんが外出のときに家に手紙を内緒で出してもらい、私の預金通帳から五〇円を送ってもらった。これで当分はうまい物に事欠かないだろう。当時の五〇円は給料取りの一か月分の給料に相当した。

（続く）

短歌

古平町岬短歌会

美しき看護師さんに囲まれて楽しく送る病院生活
今日も又若く美しき看護師さんに言葉かけられ元気つけらる　竹内コト

如月の南は桜の咲きおれど北は凍れて雪の花咲く
真夜覚めて窓辺の雪のくずれゆく音の聞こゆる春に近づく　田中香苗

寒さの中ひたすら春を待つ心遠き日の青春の心にも似て
心地良き冬晴れとなり雪道に家並みの影くっきりと見ゆ　堀典子

年久に聞かざりし音よ後ろの人下駄に凍て雪きしませて来る　池田テル

俳句

古平ホトトギス会

老い同士たがひに着眼れ笑ひ合ふ　斉藤波留
沸々と小豆煮え来る冬至かな　山口悦子
奥深く響く柏手松の内　越野敏雄
寒行の声高く闇祓ひ行く　大和田絵伊
待ち合はせの時過ぎたれど息は来らずあたり暗めて雪降りしきる　奥山きよみ
ぼんやりと雲の向ふに陽の見えて細かき雪のひと日降り継ぐ　鈴木時子
裏山の落葉松林はしんしんと降る雪の中悠然と見ゆ　丹後初江

凍月の野原高々暁けにけり　関口勝志
降り止んで雪のあしたの静けさよ　よしざきり
冬海に峙つ崖の高さかな　越野清治
大吹雪硝子戸叩く音やまず　仲谷比呂古
夢の中まで除雪車の音駆くる　室屋弘子
幸平吟
除雪車の音遠くなり近くなり
捨雪を渡り歩ひてゐる鴉
捨雪の帯となりゆく渚かな
捨雪の山渚までブルの音
捨雪の山と積まれし渚かな

古平町史年表

—10—
明治23年～明治30年

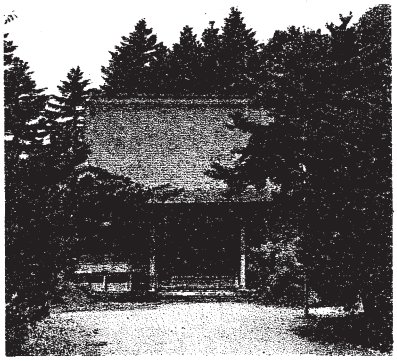
☞ 明治２３年（１８９０）

▲鱈釣り漁に従事する漁業者の遭難が多かったことから、相互扶助を目的として鱈釣同業者相扶会が設立される。

▲浜中小学校は尋常科４年、温習科１制となり、浜中尋常小学校と改称し、群来・沖・沢江の各小学校はそれぞれ分校となる。

▲宝海寺の本堂・庫裏が完成し、新地町から現在地に移転する。

▲古平教育衛生会を設立したが明治４１年解散し、新たに古平教育会を組織する。



<改築前の宝海寺>

☞ 明治２５年（１８９２）

▲小樽西谷回漕店の小島丸（15トン）が小樽から古平までの定期船として毎日１往復運航する。

☞ 明治２６年（１８９３）

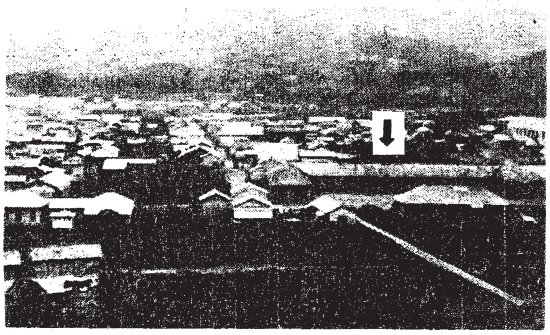
▲浜中尋常小学校（222坪・工費21、138円50銭）が浜町97番地（現在の役場裏）に新築される。

☞ 明治２７年（１８９４）

▲北海道消防規則ができその施行地に指定され、古平消防組が組織される。

▲余市銀行が創立。港町に古平支店を開設する。

▲小町泰次郎が後志丸（25.3トン）ほか北国丸、美国丸を古平～小樽間航路に就航させる。



⬆ <浜中小学校校舎と女生徒> ⬇

☞ 明治２８年（１８８５）

▲浜中尋常小学校に温習科を改め、修業年限４か年の高等科を併置、浜中尋常高等小学校と改称する。また各分校を分教場と改称する。

☞ 明治２９年（１８９６）

▲古平漁業組合が設立される。

▲本間礼太郎が浜町で酒造業を始める。福正宗・清泉・千登勢の銘柄で販売する。後に「繚爛」となったが、昭和３２年廃業する。

▲古平町内の全戸が加入して、古平衛生組合を組織する。

☞ 明治３０年（１８９７）

▲森林監守駐在所を浜町に置いて、美国郡・積丹郡も担当する。

▲全道が１８支庁に分割され、郡役所の名称も廃止になり、古平は小樽支庁の管轄になる。

<繚爛こもかぶり>